

岐阜県古川小学校の「ふしづくりの教育」を支えた中家一郎校長の音楽教育観 (2)

三村真弓

(本学大学院教育学研究科)

吉富功修

(本学名誉教授)

The Music Educational Philosophy of Ichiro NAKAYA Supporting 'FUSHIZUKURI EDUCATION' as the Principal of FURUKAWA Elementary School in GIFU Prefecture (2)

Mayumi MIMURA Katsunobu YOSHITOMI

Abstract

'Fushizukuri Education' is a milestone in Japanese music education. It was practiced in Furukawa Elementary School in Yoshiki District, Gifu Prefecture and achieved a brilliant success.

In 1966, Furukawa Elementary School was selected as a pilot school for elementary school music education. Ichiro Nakaya, a section chief in the local education office in Hida at that time, is the person who had a great influence on this selection. When Hiroshi Yamamoto, the supervisor of Gifu Prefecture, asked Nakaya's advice for the selection of a pilot school, Nakaya recommended Furukawa Elementary school where he graduated. In 1967, Nakaya became the principal of Furukawa Elementary School and showed his tremendous ability in school management. He consistently supported "Fushizukuri Education" and highly contributed to its development. This paper clarified the untold music educational philosophy of Principal Ichiro Nakaya.

V 中家一郎と「ふしづくりの教育」

中家一郎は、飛騨教育事務所の課長だった昭和41年初頭に、岐阜県の指導主事であった山本弘からの相談を受けて、次の音楽科研究指定校として、自らの母校でもあり、かつての勤務校でもあった吉城郡古川町立古川小学校を紹介した。その結果、古川小学校は、昭和41年度から2年間、県の研究指定校となる。そして中家は、昭和42年4月に、校長として古川小学校に赴任した。このように中家と「ふしづくりの教育」は、その発端から浅からぬ因縁で結ばれていた。古川小学校での「ふしづくりの教育」の隆盛には、学校経営に対する校長としての中家の実力と、教員への卓越した指導力が寄与したと考える。

中家校長が昭和49年度に退職したのち、昭和50年度から3年間は山下一男校長が「ふしづくりの教育」を引き継いだ。しかし、昭和53年度に赴任したZ校長は、その最初の訓示で、「私は「ふしづくりの教育」を潰しに来た。」と発言した。Z校長は、1年ごとに1/3の教員を異動させ、3年間で「ふしづくりの教育」に関係していた教員ほぼ全員を古川小学校から出したと言われている。こうして、「ふしづくりの教育」は消滅していったのである。倉庫に保管されていた「ふしづくりの教育」の資料もすべて焼却されたという。

この一事からも、中家校長の存在が「ふしづくりの教育」を支え、発展させた原動力の1つであったことが理解できる。

中家の著作は多くない。しかも、飛騨人として、自分の名前が表に出ることを嫌う気質をもっていた。中家の名前ではなく、古川小学校名で書かれた文章も、その内容から中家が執筆したであろうと推察でき

るものが多いが、本稿(2)では、中家一郎の名前が明記されている第一次史料のみを対象とし、それらから中家校長の音楽教育観の特徴を明らかにする。さらに、中家の音楽教育観が古川小学校の「ふしづくりの教育」に及ぼした影響を解明する。

本稿で扱う第一次史料は、自筆ノート「研究記録 2号」(S. 39. 10. 15～)、『ふしづくり一本道—基礎能力を培うために—』(S. 44. 7. 25)、『音痴の考える音楽教育』(S. 45. 5)、「ふしづくりの教育の理論と実践—岐阜県古川小学校の場合—」(S. 46. 12)、「全国から注目された古川小学校の教育」(S. 46. 12)、「子どもの能力開発のために」(S. 47. 11)である。昭和45年前後に書かれた文章は、内容的に重複するものが多いが、まずそれぞれの内容を提示する。

VI 中家一郎の著作に見る音楽教育観

1 自筆ノート「研究記録 2号」(S. 39. 10. 15～)

このノートは、中家が昭和39年10月15日から書いているもので、おおよそ昭和46、47年くらいまで執筆されたものであると思われる。内容のほとんどは中家が行った講演内容のメモや、教育に関する中家の考えをメモしたものである。主なものとしては、「道徳指導について」(39. 11. 20, 久々野中)、「生徒指導について」(39. 11. 24)、「道徳と学活の関連について」, 「現代日本の課題」(40. 2. 16)、「道徳教育について」(40. 2. 25, 高根)、「成人式」(40. 5. 15, 莊川)、「青年団に」, 「教頭研修会 研究授業の観方について」(40. 11. 18, 中原中)、「道徳教育講習」(40. 12, 岐平)、「幸福な生活(人間の生き方)」(41. 1. 15)、「日本教育の展望」, 「小学校道徳指導書」, 「初任者講習会」(41, 高山公民館)、「神岡町教頭会」(41. 5. 20)、「道徳講習会」(41. 9, 高山北小)、「学習指導の個別化」(41. 11. 19, 下呂小, 41. 11. 22, 中山中)、「子どもの家庭教育について」(42. 1. 31, 下呂西小)、「指導管理(43. 3. 16, 教頭会) 指導管理(43. 10. 22, 教頭会) 」「カウンセリングの方法」, 「音楽研究会」(46. 8. 5, 福井)、「ふしづくりの教育」(46. 8. 18, 大垣)、「幼児教育」等がある。全体的に、道徳教育や生徒指導に関する内容が多いことがわかる。これらのうち音楽教育に関する内容は、「音楽教育会」と「ふしづくりの教育」のみであるが、これらをまとめて雑誌に掲載されたのが後述する「ふしづくりの教育の理論と実践—岐阜県古川小学校の場合—」である。

このノートには、ブルーナー著『教育の過程』(S. 38. 11)の内容についてのメモも書かれている。これは、前後のメモの日付から、昭和40年5月～8月の間に書かれたものである。このメモ以後の講演にはブルーナーの理論に関する内容がしばしば見られ、中家がブルーナーから影響を受けたことがわかる。以下に、昭和40年11月18日に益田郡中原中学校で行われた「教頭研修会 研究授業の観方について」の内容を示す。

「教頭研修会 研究授業の観方について」(40. 11. 18, 益田郡中原中学校)

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 人間観, 教育観, 児童観<ul style="list-style-type: none">先天的素質—性格—教育との関係<ul style="list-style-type: none">先天的には素質の差はない性格…ルソー・孟子(性善説), 荀子・キリスト・ラッセル(性悪説), ロック(白紙説)子どもの能力の発達<ul style="list-style-type: none">医学的に観ても<u>訓練</u>である。脳は発達する性格の転移<ul style="list-style-type: none">訓練や躰によって転移する血液型との関係は根拠がない2. 人間の思考の発達について<ul style="list-style-type: none">ブルーナーの意見(教育の過程)<ul style="list-style-type: none">仮説：<u>どの教科でも知的性格をそのままをもって発達のどの段階のどの子どもにも効果的に教えることができる</u> |
|---|

学習の仕方を学習するようになる→学習態度の育成
学習の過程と教科の構造について研究するようになった。

3. 学習の過程

- ・単に教科の学問的な系統性でなく、子どもの思考の発達も充分考慮した系統性を持たせること
- ・4つの考え方
 - ①学習における構造の役割—新しい知識との結びつき
 - ②学習のレディネス—どの子どもにも理解させることができる、ラセン形教育課程
 - ③直観の性格—鋭い推察、創意豊かな仮説、暫定的結論に対する勇氣ある飛躍
 - ④学習意欲とそれを刺戟するしかた（興味）—学習する教材そのものにも興味をもつことこそ学習に対する最もよい刺戟である。

4. 教科の構造

- ①基本的なものを理解するならば、教科も理解し易くなる。
- ②人間の記憶力
細かい事は構造化された全体のパターンの中に位置づけなければ忘れてしまう。
- ③基本的な原理観念の理解は適切な訓練の転移に通じる大道である。—モデルを学習したことになる。
- ④指導に当たって構造と原理に重きをおく。—教科を教えるという事は教科の構造を示すことである。

5. 授業の構造（学習指導）

- ①過去に学習した事を大切にす。
- ②新しい事象を指導するために前と結びつける。
- ③適当に反復練習をすること。
- ④教材の順次性のみでなく、子どもの学習の順次性を考える。
- ⑤表現学習
耳から入れる教育（話し合い活動）—目（図表・観察）、口（発表）、手足（動作・実験）
←多様な学習活動、創造的（態度・技能）

⑥話し合い活動

要するに

- ①子ども自らが具体的に考える場が持たれているか（言葉だけでなく実質をつかむ）。
- ②集団の中で考えられているか（1人ひとりの思考を無視してはいけない）。
- ③問題どうしの間に有機的な関係を持つようとしているか（構造的関連としているか、並列的でないか）。
- ④考える方向はどんな方向をもっているか（科学的・知的な方向に位置づけていく）。
- ⑤創造的意欲が働いているか。

◎学習態度の養成

自主的な学習—意欲的な学習
学習態度の問題（臆的な問題）

*アンダーラインは、ブルナーの理論と一致する部分である。

「2. 人間の思考の発達について」の仮説、「3. 学習の過程」の4つの考え方、「4. 教科の構造」「5. 授業の構造」に見られる構造の重要性、「要するに」に見られるような学習のための動機づけの内容等は、ブルナーの理論であるといえよう。特に、学習経験の積み重ね、反復練習、学習の順次性、意欲的な学習等のキーワードは、以後の論説にもたびたび登場する。

2 「はじめに」『ふしづくり一本道—基礎能力を培うために—』（S. 44. 7. 25）

『ふしづくり一本道—基礎能力を培うために—』は、古川小学校に訪れる参観者に配布された冊子であ

る。「はじめに」のなかで、中家は以下のようなことを述べている。

昭和41年、本校は県教委から「創造性の開発をめざし、ふしづくり一本道の実践」という課題で音楽の研究指定を受けた。41年度、42年度の2か年研究を続け、42年度にその成果を発表したが、たしかにこの方法でいくと子どもの音楽学習に対する意欲はすばらしく積極的にになり、1人ひとりの子どもの能力は恐ろしいほど伸びることがわかった。およそ教育の目的が、望ましい人間形成を目ざす以上、音楽も単なる音楽教科の指導ではなく、望ましい人間形成の一環としての音楽教育でなければならない。そのためには1人ひとりの子どもをたいせつにして、充分なる能力開発をすると同時に、より豊かな情操を育てなければならない。

音楽の教育も、国語や算数と同じように基礎的な要素を順次積み上げていくことによって音楽の基礎的能力を定着させ、そこから創造性を開発して、将来、子どもたちが社会人となっても学習したことを基盤として、発展的に自ら伸ばしていけるものでなくてはならない。もともと音楽の指導において教材を充分にこなしながら、その教材をとおして音楽の基礎能力を順次積み上げていくことが常道であると思うが、一部の堪能な教師を除いて音楽教育の目的を充分に達成することができなかった。したがって音楽ほど子どもに能力差があり、発展性がなく、その開発に問題点が残されていた教科はなかったと考える。

そこで本校では、音楽の基礎を段階的に指導することを考えたのである。一見基礎指導と教材指導の2本立てのように思われるが、実際の指導にあたっては無理なく相互に結びついていく。そして音楽の堪能な教師でなくてもだれでも指導できるし、子どもも大変意欲的に学習していく（古川小学校1969, p. 1）。

以上のことから、中家が、音楽教育を人間形成の一環として捉えていること、従来の音楽教育では音楽の基礎的能力が獲得されず能力差があったので、音楽の基礎を段階的に指導することが重要であると考えていることが明らかである。

3 『音痴の考える音楽教育』(S. 45. 5)

本書は、昭和45年5月に日本楽器の依頼を受けて執筆されたもので、日本楽器によってタイプ印刷され、公表された。東北地区では、増刷されたという記録がある。

本書は、全10ページであり、「母校の校長となる」「文化国家としての日本」「従来の音楽教育」「音楽教育の改善」「学習用具としての楽器」「学習の個別化」の内容で構成されている。

まず最初に、師範学校時代のオルガン学習が難しかったこと、教育実習における唱歌授業での失敗談、これまでの教員歴で最初の2年間しか音楽を担当していないこと、自分が音痴で音楽は最も不得意な教科であること、したがって音楽嫌いであることを、中家は述べている（中家1970, pp. 1-3）。

従来の音楽教育に対する批判としては、①教育は低次なものから順次積みあげてほしいに高次なものへと発展させていくべきものであるが、音楽では基礎能力の積みあげは全然なされておらず、1年生から6年生までテンポや強弱を1時間中繰り返している、②最も感覚がにぶく、最も不勉強なのが音楽教師であって、もし子どもが積極的に授業にのってこないのならば、なぜもっとその原因を追求して指導法の改善をはからないのか、③音楽教師は芸能家的意識が強く教育者の意識が弱い、したがって子どもの実態に立って音楽を考えようとしていない、と述べている（中家1970, pp. 4-5）。

音楽教育の改善に関しては、①音楽教育が情操教育の重要な一翼を担当していることをあまり強く表面に出すと、歌唱表現や鑑賞にウェイトがかかって、最も重要である基礎がおろそかになること、②下手くそでもいいので、自分で笛を吹いたり、自分でオルガンを弾いたり、自分で歌を口ずさむ時こそ、その子の心に響くのであり、これが情操教育であること、③本校では、30段階100ステップを「ふしづくり一本道」と名づけているが、これは基礎能力を育てるためのプロセスであって、そのプロセスのなかには創造性を培うということが全面的に含まれていること、を述べている（中家1970, pp. 6-7）。

学習の個別化に関して、①本校では、教育目標として「主体的で創造的な学習態度の育成」を目ざしていること、②学習の個別化とは個別指導のことではなく、1人ひとりの子どもが主体的に学習に参加する機会をつくってやること、③主体的とは子どもの学習の姿勢を意欲的にし、自分の責任で学習と取り組む姿勢のこと、④学習の個別化をはかるには、関連的な内容をもって基礎的な力がないと意欲的に取り組むことが難しいので先行経験の上に少しずつ積みあげていくような音楽教育のプロセスに乗せてやらなければならないこと、⑤それさえできておればきわめて学習が主体的になり基礎的な力が身につくと同時

に創造的な学習ができること、⑥個別化の方法として、全体の中に個を生かす、グループの中に個を生かす、子どもの1対1の中で個を生かす、などが考えられること、⑦個別化をはかするには、まず第1に学級が真に民主化され、1人ひとりの子どもが大切にされていなければならないこと、⑧それには学級の子どもの実態を1人ひとりよくつかんでいる必要がある、したがって小学校などではどんな教科も担任が指導することが望ましいこと、⑨本校では音楽のみならず全教科を担任が指導しているために、生徒指導がよくできていて、子どもたちは大変明るく学習していること、が述べられている(中家 1970, pp. 9-10)。

中家は、自分自身が音痴であるために従来の音楽教育の欠点を熟知しており、それゆえに、どうしたら音楽嫌いをつくらず、音楽的な基礎能力をつけられるのかという課題意識を強くもっていたと考えられる。主体的で創造的な学習、経験を積みあげていくプロセス、という考え方はブルーナーの理論の影響であり、生徒理解や生徒指導の重要性の認識は、長年道德教育や生徒指導に手腕を発揮してきたベテランの校長ならではの見解であろう。

4 「ふしづくりの教育の理論と実践—岐阜県古川小学校の場合—」(S. 46. 12)

この論考は、『音楽教育研究』に寄稿されたものである。これまでの論考を踏まえてかなり詳細に論じられている。本論は、「1. ひとり歩きのできる音楽教育」、「2. ふしづくりの教育」、「3. ふしづくりと教材との関係」、「4. 学習方法の改善」、「5. 人間形成としての音楽教育」で構成されている。

「1. ひとり歩きのできる音楽教育」では、①音楽教師は、専門家気取りできわめて芸術家的意識が強く、教育者の意識に欠けていた、②ひとり歩きのできる音楽教育を進めるために、何よりも改善を要するのは音楽教育に対する考え方であり、音楽教師の頭の切替えである、と音楽科教師に対する痛烈な批判が述べられている(中家 1971a, p. 13)。

「2. ふしづくりの教育」では、①「ふしづくりの教育」は、1年生から6年生まで6年間に必要な音楽の要素を楽しく学習できるように系統立てたもので30段階100ステップになっていること、②子どもの発達段階にしたがって、音楽の要素を身につけさせるためには、その基礎となるものを、どんな順序で、どんな方法で学習させたらよいかということを実験の結果からまとめて体系づけたもので、決して概念的な机上プランではないこと、③ふしづくりという、その言葉から何か狭い意味の創作指導のように受けとられるが、決してそういう意味ではない、結論的には創作まで発展するが、これは音楽における基礎をふまえた創造活動であり、指導要領に書いてある音楽のすべての領域を総合的に身につけていくことができること、④一般的に音楽の基礎というと、基本的な音楽理論であると思うが、ここでいう基礎とは、もっと根本的な子どもの音楽的感覚をさしていること、⑤「ふしづくりの教育」は、低学年から遊びを中心とした楽しさのなかで基礎を順次積みあげていき、その学習活動には幅があって、能力に関係なく、どんな子どもも楽しさを味わうことができること、⑥学習活動のなかで自分もいっしょに活動できたという満足感があり、主体的に学習できるようになるので、子どもはだんだん音楽の学習を好きになること、⑦「ふしづくりの教育」において、低学年では遊びを中心にした身体表現から入り、高学年に至るまで感覚を優先すること、⑧「聞いて」—「吹いて」(模奏)—「歌って」(リズム唱、階名唱、歌唱)—書く(記譜)という順序で進めること、⑨「ふしづくりの教育」では即興性を重視しているので、子どもの表現は形にとらわれない自由でまったく感覚的なものであり、音楽の理論的裏づけはないこと、⑩子どもの音楽的感覚は1人ひとり異なっており、その子の表現したものはその子にとっては絶対的なものであるので、教師はあまり指導性を発揮することはしないが、子どもの感覚は鋭くて、だんだん正しいものに近づいていくこと、⑪算数や理科の場合には現象や事実を帰納して法則や原理をみちびき出すように指導しているのに、音楽の場合は音楽理論をふりかざして教材を指導している、これは逆コースであること、⑫「ふしづくりの教育」では、愚作の多作でよく、感覚が育つにつれてだんだん美しく正しいものが生まれてくること、が述べられている(中家 1971a, pp. 13-15)。

「3. ふしづくりと教材との関係」では、①教科書の教材は歌詞や歌曲の程度や季節などを考慮して配列されているので根本的な系統性はない、したがって、義務教育を終えてもひとり歩きできる子どもは育たないこと、②45分の授業において、低学年では15分、中学年では20分、高学年では25分のふしづくりの時間をとっていること、③授業の始めに基礎指導の時間をとることは当然なことで、算数ではかけ算九九や暗算を練習し、国語でも漢字や仮名の練習をすること、④授業の始めにふしづくりの時間をとる

と教材指導の時間は少なくなるが、ふしづくりによって子どもの感覚がすばらしく育ち、基礎が身につくので、従来の半分以下の時間で教材の指導ができること、⑤子どもたちは、教材の学習よりも、ふしづくりの学習の方を喜ぶようになることから、「ふしづくりの教育」によって創造的な活動ができ、子どもの意欲をかきたてるのだということ、⑥ふしづくりでは教師はあまり指導性を発揮しないが、教材の指導にあたって、できるだけ子どもの先行経験によってみんなで話し合っって表現の工夫すること、が述べられている（中家 1971a, pp. 15-17）。

「4. 学習方法の改善」では、①学制頒布から百年になるが、音楽の指導は依然として変わることがなく、教師中心主義で一方的に音楽の理論をふりかざした授業が多い、②恐るべきことには低学年も高学年も指導内容は同じである、③大半は、教師の小言と注意で終わり、子どもが考える余地はなく、子どもが実際に学習する時間はきわめて少ない、④これは教師に教育者の意識が欠けているからである、とこれまでの音楽の授業を批判している。そして、⑤本校では、子どもの学習時間を多くするために学習の個別化をはかっていること、⑥ひとり学習、ペア学習、グループ学習によって、子どもの学習活動の量を多くし、創造的な活動ができて自己実現ができる場を多くしていること、が述べられている。また、鍵盤ハーモニカの有効性にも言及されている（中家 1971a, pp. 17-18）。

「5. 人間形成としての音楽教育」では、①教育とは、1時間1時間を大切に、1人ひとりの子どもに充実感を持たせ、子どものもっている無限の可能性をひっぱりだしてやることである、②それには子ども1人ひとりの個性や能力を教師がしっかり把握していることが重要であり、③小学校においては子どもの実態をもっともよく知っている学級担任が指導すべきである、④小学校において、本当に人間形成を考えるならば、人間尊重を基盤に置いた温かい民主的な学級経営に立って教科の指導を考えなければならない、⑤本校では学級担任が全教科を指導している、そういう学級の雰囲気こそ主体的な学習態度ができてくるのである、と主張されている（中家 1971a, pp. 18-19）。

本論は、中家が執筆した「ふしづくりの教育」に関する論考のなかでは、最も充実したものであり、中家の音楽教育論が随所に見られる。

5 「全国から注目された古川小学校の教育」(S. 46. 12. 20)

本論考は、古小 PTA 会報『かたらい』の記事である。

中家は、中教審の答申の根底に流れるものは、「第1 人間性の回復 第2 人間の可能性の開発」の2点に集約されると述べ、「本校ではつとに五年前からこのことあるを予見して、具体的な研究を集め、最も問題点の多い音楽科を通じて教育改善の方途をみつけようと努力してきたのであります。そしてようやく小学校教育の方途について画期的な理論をうち立て、それを実践しているのです。……今や古川小学校の教育は音楽教育だけの問題ではなくなっています。教育のすべてを支える人間形成の問題であり、それは我が国教育界のみならず全世界の当面せる難問であるという事を校下の皆様も御認識願ひ度いと思ひます」と結んでいる（中家 1971b, p. 1）。つまり、古川の「ふしづくりの教育」は、音楽科教育の優れた方法であると同時に、人間形成のための優れた方法であると、中家は主張しているのである。

6 「子どもの能力開発のために」(S. 47. 11)

この論考は、『音楽教育研究』に寄稿されたものである。

中家は、①音楽性とは音楽的能力のことであり、音楽的能力とは「音楽的感覚」「音楽的技能」「音楽的理解」のことである、②これらの指導においては、従来ややもすると歌唱中心で教材曲を指導しながら、読譜指導をやり、歌唱表現を指導し、楽器演奏へと発展させるような授業が行われていたが、そういう方法では教師が主体になってしまっって、子どもは常に受け身の姿勢におかれるものだから、音楽をだんだん嫌になっていく子ができて、音楽の目標を達成することができなかった、③これに対して立場をかえて、子どものもっている感覚を大切に、まず第1に感覚を育てることから指導していけば、子どもは喜んで自ら音楽的な開拓をしていき、主体的で創造的な学習をやるようになる、と述べている（中家 1972, p. 116）。

また中家は、④本校では学級担任が自分の学級の全教科を指導しており、教科の交換指導や音楽も専科制をとっていない、と述べている。これは、⑤教師にも得意、不得意はたしかにあるけれども、子どもの正しい人間形成をはかるには、子どもの実態をもっともよく知っている担任が指導した方がよいからであ

り、多少、音楽が得意だからといっても、子どもの実態を知らなければかえって多くの子どもを置き去りにしてしまうのが常であるからである。中家は、⑥教科を教えるのではなく教科をとおして調和のとれた人間形成をはかるのだということを念頭におきたいと主張している（中家 1972, p. 121）。

中家は、従来の音楽科教育が教師主体で行われたために、子どもが受け身になってしまうことによって音楽嫌いになったと考えている。また彼は、音楽教育には音楽的感覚を育成することが必要であることを認識していた。さらに、人格形成のための音楽科教育のためには、子どもをよく理解している担任が指導すべきだという考えをもっていたことがわかる。

Ⅶ 中家一郎校長の音楽教育観の特徴と、古川小学校における「ふしづくりの教育」へ与えた影響

中家の音楽教育観の特徴の第1点は、彼自身が音痴で音楽嫌いであったからこそ、子どもを音楽嫌いさせないためには何が必要かということを知っていたことである。これによって、古川小学校の教師たちが試行錯誤しながらつくりあげていった、「ふしづくりの教育」システムを正当に評価することができたと考える。

特徴の第2点は、中家が影響を受けたブルーナーの理論と、古川小学校の「ふしづくりの教育」システムの原理とは一致する部分があり⁶⁾、それが彼の音楽教育観の根幹をなしていることである。また中家の教育観が、「ふしづくりの教育」システムの構造化、学習スタイルの確立へと影響を与えたと考える。

特徴の第3点は、中家が、「ふしづくりの教育」を音楽科教育の有益な指導法として評価するにとどまらず、人間形成の手段として捉えていたことである。それは、音楽科授業を、音楽専科教師あるいは音楽の得意な教師が担当するのではなく、たとえ音楽が不得手でも学級担任が担当すべきであるという彼の強固な主張に顕著に表れている。なぜなら、信頼関係のある学級担任だからこそ、子どもの個性や能力や心情を真に理解することができ、そのことによって主体的な学習態度を育成することができ、また主体的な活動をとおして充実感や達成感を引き出すことができるからである。これは音楽科授業にかかわらず、全教科をとおして子どもの人間形成を達成しようとする中家の教育観によるものである。当時の音楽主任であった山崎俊宏は、古川小学校で「ふしづくりの教育」がうまくいったのは、音楽専科教師が居なかったからであり、学級担任が担当することによって、教師主導の音楽科授業にはなり得なかったことが大きいと述べている⁷⁾。

「ふしづくりの教育」は、30段階100ステップの系統的なカリキュラムで有名であるが、それを基本とした毎時間のふしづくりの実践の方が、実は重要だったのである。個人でふしをつくる。それをグループ内で披露しあい、意見の交換をしながら、今日はA君のふしにしようグループのふしを決定する。グループ発表に向けて練習し合うなかで、A君のふしに合うふしをつけたり、合う和音をつけたり、リズム伴奏をつけたりする。その間、音楽の得意な子が不得意な子に教えたり、どうやったらうまく行くかアイデアを出し合ったりするなかで、共感的な人間関係を育成することができる。あるいは他者から自分の作品が認められることによって自己存在感・自己肯定感を感じることもできる。また子どもたちがすべて主体的に行動することによって、常に自己決定感を高めることができるのである（山崎 1973, p. 177）。単なる優れた音楽科カリキュラム・音楽指導法にとどまらず、こうした意義があったからこそ、人間形成に貢献する「ふしづくりの教育」となり得たのであり、中家校長が在任中長く継続・発展することができたのである⁸⁾。

全国から古川小学校に視察に訪れた何千人もの教師たちは、自分の学校へ「ふしづくりの教育」をもち帰って試みようとした。しかし、古川小学校のように長く継続できなかつたのは、音楽教育自体を目的とし、子どもの人間形成を目的としなかつたからかもしれない。まさに、中家一郎校長あつての「ふしづくりの教育」であつたという。

【注】

1) 山本弘（2000）『授業』文芸社、p. 193。本書の「あとがき」で、「この記録は、表紙に『老教師の教育遍歴』と書いたので、私の実践と思われるだろうが、失敗例は私のものだが成功例はすべて数え切

れぬ大勢の【研究指定校の皆さん】のものを無断拝借した。ここにお詫びしながらお礼申し上げたい。」と述べ、「先ずは一生私を支えてくれた戦友ともいべき小学校からの同級生中村好明君と故・下通進平君である」。そして、「今になって悔いだけが残ったので中村君にお礼を言う。君の実践研究の殆どを拝借したことを有り難う」と謝意を表している。さらに、「指定校では何と言っても故・福井浄輔校長、それに中家一郎校長と後を継がれた山下一男の両校長である。中でも大先輩の福井浄輔・中家一郎のお二人には、校長はどう有らねばならぬものかを、現実の姿で教えていただいた。特に中家校長にはこの本を貫く実践を拝借させていただいて感謝している。」と述べている。

- 2) 全体会は山口市の白石小学校・白石中学校で開催され、1300人が参加した。
- 3) 中家校長のご遺族・中家中和久氏のご好意と、元古川小学校音楽主任・後の同校教頭である山崎俊宏氏のご尽力によって、本稿(1)で扱う中家校長の自筆の「四十年の教員生活 回想録」、および本稿(2)で扱う、自筆ノート「研究記録 2号」、『ふしづくり一本道—基礎能力を培うために—』、『音痴の考える音楽教育』、『ふしづくりの教育の理論と実践—岐阜県古川小学校の場合—』、『全国から注目された古川小学校の教育』、『子どもの能力開発のために』等入手することができた。
- 4) 昭和47年度当時のもの。実践を重ねながら柔軟に修正を加えたために、段階数とステップ数は年度によって異なる。
- 5) 中村隆夫「一時間の中で教師がしゃべる時間が五分以内なら、授業の名人や。十五分ならまずまずや。それ以上しゃべるとしたら、子どもはちっとも動けとらん。」という話は古川小に語り継がれている。日本音楽教育学会第43回大会シンポジウム(2012年10月8日)発表資料, p.10。
- 6) 中家は、昭和42年に古川小学校へ赴任して1学期が過ぎた頃、「ふしづくりの教育」とブルーナーの理論には共通性があると山崎俊宏氏に話し、それ以後指導・助言の際に度々ブルーナーの理論が引用されたとのことである(平成25年2月28日に、山崎俊宏氏に行ったインタビュー調査による)。
- 7) 平成24年10月9日に、山崎俊宏氏に行ったインタビュー調査による。
- 8) 昭和40年度～41年度に文部省の研究指定校であった温知小学校でも「ふしづくりの教育」が試みられていた。41年度の研究成果発表会で授業を観察した山崎俊宏氏は、授業全体の8割が教師主体で進められ、教え込む方が強いように感じたときを振り返っている(平成25年2月28日に、山崎俊宏氏に行ったインタビュー調査による)。温知小学校では、2年間の研究指定校終了後「ふしづくりの教育」は行われなくなり、現在の温知小学校にはその当時の史料や記録は一切残っていない。

【引用・参考文献】

- ブルーナー, J. S. (1963)『教育の過程』鈴木祥蔵・佐藤三郎訳, 岩波書店.
- 古川小学校 (1969)『ふしづくり一本道—基礎能力を培うために—』古川小学校.
- 中村隆夫 (私家版)「中村好明くなくむらよしあき」ふしづくりの教育 略歴」
- 中家一郎 (1964～)「研究記録 2号」自筆ノート.
- 中家一郎 (1970)『音痴の考える音楽教育』日本楽器.
- 中家一郎 (1971a)「ふしづくりの教育の理論と実践—岐阜県古川小学校の場合—」『音楽教育研究』No.68, 音楽之友社, pp.12-19.
- 中家一郎 (1971b)「全国から注目された古川小学校の教育」古小PTA会報『かたらい』第66号, 古川小学校PTA文化部, p.1.
- 中家一郎 (1972)「子どもの能力開発のために」『音楽教育研究』No.79, 音楽之友社, pp.114-121.
- 中家一郎 (私家版)「四十年の教員生活 回想録」
- 山本弘 (1981)『誰にでもできる音楽の授業—ふしづくりの音楽教育紙上実技講習—』明治図書.
- 山本弘 (2000)『授業』文芸社.
- 山崎俊宏 (1973)『ほんものの音楽教育を求めて』古川小学校.